

琵琶湖疏水の水を利用した南禅寺塔頭群の紹介

1) テーマの趣旨

南禅寺は鎌倉時代に創建された禅宗・臨済宗南禅寺派の大寺院で、室町時代に入ると京都五山(①天龍寺②相国寺③建仁寺④東福寺⑤万寿寺)の上に立つ別格扱いの寺院として栄えた。そして、寺域には多くの塔頭(たちゅう)寺院も存在し、度重なる戦乱の中で建物は焼失・再建されたものが多かったが、庭園の中には昔の姿を留めてきたものも存在している。一番大きい改革は、明治維新時の廃仏希釈で、南禅寺も大幅に寺域の縮小や塔頭の縮減が避けられなかった。最も寺勢が弱かった明治初中期に、半ば強制的に琵琶湖疏水の水路を境内の中に通すことになり、現在の「水路閣」が生まれたのであるが、水脈断絶の見返りとして南禅寺と塔頭寺院の庭園用水に疏水の水を使用できる権利を確保したのである。

今回のテーマは、過去約 300 年の間隔で登場した 3 人の庭師が作庭した庭園が極めて近接したところに存在し、いずれも疏水に水で潤っているという話題である。

2) 3 人の庭師の紹介

京都の庭園史分野の第一人者である尼崎博正先生(京都造形芸術大学)が、茶道誌「淡交」587号(平成6年)に掲載された「植治の路地」の記事の中に、“時代の変革期に斬新なデザイン感覚を備えた造園家が登場しているのも興味深い”とし、夢窓疎石・小堀遠州・小川治兵衛の3人を挙げている。

この3人の活躍した時期を比較表示すると、

名前	生存期間	職業	時代の特徴
夢窓疎石	1275～1351	僧侶・造園家	鎌倉時代末から南北朝・室町時代初期
小堀遠州	1579～1647	茶人・造園家	豊臣・徳川に仕えた江戸時代の造園家
小川治兵衛	1860～1933	造園家	明治・大正の近代庭園を多く造庭

この3人は1300年代の前半、1600年代の前半、1900年代前後に活躍しているので、概略300年間隔とみてよい。

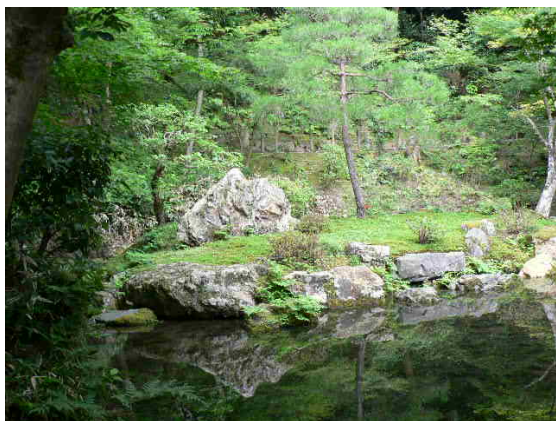
夢窓疎石は南禅寺の塔頭・南禅院庭園、小堀遠州は南禅寺方丈前の庭園と南禅寺の塔頭・金地院庭園、小川治兵衛は南禅寺の旧寺域にある無鄰菴と南禅寺の塔頭・光雲寺庭園および琵琶湖疏水の水を活用した平安神宮神苑の作庭を実施しているが、いずれも京都地下鉄の蹴上駅と隣接の東山駅を利用すれば歩いて散策できる距離にある。

— 1 —

3) 3 人の庭師の特徴比較

日本の伝統的な庭園は、自然の風景を正確に模写することに重点を置き、景勝地の海岸風景にこだわりつづけたが、この3人の庭師は伝統にこだわらない改革を試みた。夢窓疎

石は、その地形的特長に注目して風景を再構築し、造園をデザインした最初の庭師と言われている。小堀遠州は、造園に人工のデザインを導入し切り石を用いた直線護岸を設計して注目された。七代目小川治兵衛については無鄰菴や平安神宮神苑の作庭を前項・前々項で説明したが、眺める庭園から味わう庭園へと転換した。



夢窓疎石が作庭と伝えられる南禅院庭園



小堀遠州の作庭と伝えられる南禅寺方丈の庭

庭園の鑑賞は専門的に難しいことであるが、どこに違いがあるかを意識しながら3人が作庭した庭園を見学すると、素人でも新しい発見があるものである。

関連ホームページ http://www.geocities.jp/biwako_sosui/

琵琶湖疏水の観光開発を推進する 近代京都の礎^{いしづえ}を観る会